

事務局便り

令和6年7月10日



—令和6年度 夏期研修会のご案内—

「授業に生かす衣生活研修会」8月8日（木）会場：東京都中央区立晴海中学校

「授業に生かす食生活研修会」8月9日（金）会場：お茶の水女子大学附属中学校

夏期研修会の詳細が決まり、6月10日より申し込みを開始しております。詳しくは、別紙案内チラシの通りです。

衣生活研修会は5月にお知らせした教材とは全く異なる教材となり、申し訳ございません。会場に出向き、会場校の家庭科の先生とクロッサムさんで協議をしました。前回の教材では、2つとも布地の面積が大きく扱いに難があり、教室の机でも実習できる教材と致しました。その関係で、参加費も下げました。

食生活研修会は、保存食品である「こうや豆腐」について、メーカーの旭松株式会社様のお話が加わりました。災害時の食について考えましょう！

いずれの研修会も30名までとしていますので、どうぞお早めにお申込みください。

申し込みの完了は、「Google フォームの入力」⇒「参加費のお振り込み」の両方が終了した時点となります。また、「Google フォームの入力」の後に「参加費をお振り込み」をお願いいたします。

—令和6年度 第74回研究大会— *詳しくは、別紙案内チラシをご覧ください！

*第74回研究大会 8月6日(火)・7日(水) ハイフレックス型での開催

◎会場参加・オンライン（Zoom）参加のどちらかを選んでの参加です

※申込み切：7月26日（金）

すでに多くの皆様からお申し込みをいただいております。ありがとうございます。会場の関係で、会場参加は50名までとしております。お早目の申し込みをお待ちしております。昨年度は、理事会をハイフレックス型開催でしたが、常任理事の負担を考慮し、理事会は会場のみでの開催と致しました。九州地区の研究会と毎年重なっているなど、理事会の開催時期・方法については、今後検討が必要と考えております。

研究大会では、2年間のご研究の成果を発表いただきます。7月中旬より参加申し込み完了者に郵送します研究集録も大変充実しております。日頃の授業の参考になると思います。ふるってご参加ください！再度案内チラシを同封しましたので、ご検討ください。

—技術・家庭科 技術分野がテクノロジー科（仮称）に再編?!—

新聞報道もあったように、技術・家庭科技術分野を再編してテクノロジー科（仮称）を要望する要望声明が、日本産業技術教育学会から出されました。（詳しくは、日本産業技術教育学会のホームページをご覧ください。）中学校では技術・家庭科という一つの教科として、技術分野、家庭分野が協力をして教育活動を行っていますので、驚かれた先生もいらっしゃるでしょう。私は、家庭科の危機がまた来たか?!と心配になってしまいました。

中学校の技術・家庭科の成立までの歴史は、とても複雑で興味深いものがあります。また、ZKKもそこに大きく関係していますので、裏面のシリーズ記事で紹介していきたいと思っております。

シリーズ～全国家庭科教育協会の歴史～（5）技術・家庭科の成立まで

① ZKK 設立前からの陳情 家庭科の独立！！

本協会発行の機関誌「家庭科」アーカイブ DVD には、陳情書・要望書中学校のファイルに『家庭科』を独立教科とする陳情書があり、その全文が以下の通りである。この陳情書には、日付が記されていないが、一緒に保存されていた「都中学校家庭科担任の先生方へ（協力依頼）」の資料などから、1949年11月24日に教育課程審議会委員宛に提出すると予想された⁽¹⁾。

1949年11月時点での教科名は、『職業及び家庭科』であった。これは、文部省通達発学261号『新制中学校の教科と時間数』の改正について（1949年5月28日）に『職業及び家庭科』という教科名で記され、『家庭科』は独立の地位に置かれたと解釈されていた。しかし、以下の陳情書に書かれているように、教育課程審議会において家庭科を職業科乃至社会科の中に吸収分散しようということが聞こえてきて、『家庭科』を一教科として取り上げる（家庭科の独立）ことを陳情しようとした。しかし、この陳情書が教育課程審議委員会の委員の方々に届いたかどうかはわからない。

翌月の12月9日には、文部省通達文初職242号「中学校における職業・家庭科について」が出され、『職業・家庭科』となり、家庭科の独立はかなわなかった。

翌月の12月9日には、文部省通達文初職242号「中学校における職業・家庭科について」が出され、『職業・家庭科』となり、家庭科の独立はかなわなかった。

ZKKは、「1949年9月に小学校家庭科存置問題が起こり小学校家庭科教員決起」ということからその歩みが語られるが、中学校の家庭科独立についても併行して活動していたと考えられる⁽¹⁾。

なお、『職業・家庭科』は、『職業ポツ家庭科』と読まれていた。この当時中学校に勤務していた中山ハルノ（旧姓天野）先生によると、『職業・家庭科』の指導内容が良くわからず、地方では長いこと行われなかったこと、東京では、名前にこだわり過ぎて、“ポツ”と力を入れて言っていたら「ポツさん」と呼ばれたと回顧している。また、予算面で、職業ポツ家庭科だから教科は一つしかないというので職業の男子の方に配当金を使われてしまうという地方の先生の泣き言を聞かされたとも回顧している⁽²⁾。

(1) 浅井直美. (2022). 全国家庭科教育協会(ZKK)の設立の経緯とその目的 日本家庭科教育学会誌 65 (3) p133-135

(2) 家政教育社 編. (1956). 座談会 家庭科のあゆみを語る. 家庭科教育 30巻4号 p38-39

陳 情 書

教育課程審議委員会の皆様には、直に日本をして平和国家文化国家としての道徳を内外に向うことが出来る教育課程を樹立する為、日夜御慮力下さっておられることに對しまして、私共現場の教育者として深く感謝致してあるところでございませぬ。委員の皆様御協力により私達は、いよいよ解散され自由の大氣のちもして、極めて民主的に教育の仕事に、いせしむことが出来るという、自信を得まして私達は、毎日の教壇生活を榮しく過して参ります。

ところが最近委員會に家庭科を職業科乃至社会科の中に吸収分散しようという御意向が白願して、いるやに承りまして私達一同驚いて、いるのでございませぬ。如何に文化が進みましようとも家庭は絶対に消滅するものではございませぬ。否、依然として家庭は人目の遠く生活の故郷でございませぬ。

孤兒の中の少からざる数が、心理的には母親の乳房の觸覚に、さに入りに転落するといふ実状を、私達は市井の一些、手として看過出来ないのでございませぬ。私達は、むしろ家庭こそ進歩的にして健全なる文化の母体と考へます。

その目的から申して、又その性格から申しまして、家庭現象は職業科や社会科の中に介錯し去つて、差支ないとは考へられませぬ。

独立の一科を設けて、徹底的に生徒の魂に植へつける必要が絶対にあると考へるものでございませぬ。

委員の皆様には、宜敷御察下さしまして、何卒家庭科を一教科としてお取り上げ下さいますよう切にお願ひ申上げます。

『家庭科』を独立教科とする陳情書

以上のように、中学校の家庭分野は、その始まりの時から、職業科などの他教科との関係に惑わされています。次号で紹介しますが、この後も、技術・家庭科という教科名になるまでに、ZKKは請願書を提出しています。今回のテクノロジー科（仮称）は、一つの学会からの提案ですので、上記の話とは少し異なりますが、注意が必要であることに違いはありません。

〈訂正〉 令和6年度1号に同封いたしました『事務局便り』のシリーズ～全国家庭科教育協会の歴史(4)の本文1行目に以下の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

誤：全国**家**高等学校**庭**クラブ⇒ 正：全国高等学校**家庭**クラブ

